

講演要旨

関羽のおみくじ（関帝靈籤）とその世界

小川 陽一

第一節 関帝廟と『関帝靈籤』

明清時代には関羽を祭った関帝廟が多く建てられ、そのおみくじ『関帝靈籤』が関帝廟や仏寺に設置され、知識人を含む多様な階層の老若男女の間に、広く流行した。

① 明・焦竑（一五四一～一六二〇）「正陽門関帝廟碑記」

（『関帝文獻匯編』第一冊所収『関聖帝君聖蹟図誌全集』巻四）

正陽門の廟は、蜀漢の関聖帝を祀るために建てられたものである。帝の祀廟は天下いたるところにあるが、正陽門関帝廟と呼ばれるのは、これが都城のために建てられたからである。

② 明・王世貞（一五二六～一五九〇）「太倉州関帝廟記」

（『関帝文獻匯編』第一冊『関聖帝君聖蹟図誌全集』巻四）

故前將軍漢寿帝侯の祠廟は天下至る所ころにあり、学校や仏寺の数に等しいほど多い。わが州の太倉（今の江蘇省太倉県）には、約数十社ある。

③ 清・袁枚（一七一六～一七九七）『子不語』巻二「関神断獄」

関帝廟が多すぎて関羽一人では手が回らないので、地方の廟では上帝の命令で、死者の中から正直者が指名されて、任務を代行している。

同巻二十二「成神不必賢者」：中には質の悪いのもいる。

『続子不語』巻十「関帝血食秀才代享」

本物の関帝が担当するのは、天子主催の国家行事のときだけである。

④ 紀昀（一七二四～一八〇五）『閱微草堂筆記』巻六

「灤陽消夏録」（六）

「古代から亀甲占いや、筮竹による易占いなど、多様な占いが行われてきたが、みな手間のかかるものだった。だが」神祠のおみくじは、一本抽くだけですぐに占いができて簡単である。

おみくじはどの神祠にも備付けられているが、関帝のおみくじが一番靈驗あらたかである。なかでも北京城正陽門わきの関帝靈籤がとりわけ靈驗がある。ほぼ一年中、元旦から除夜にかけて、朝暗いうちから夕方まで、籤筒を振る音がからからと響いている。籤筒は一組では足りなくて、数組も備付けられているが、それでも混雑して、押し合いへし合いで、籤詩を検討する暇もなければ、じっくり考え込んでいる暇もない。万能の神様

でも、忙しくて対応できないのではないかと思われる。それなのに抽いたおみくじが、面談しているかのごとく靈驗があるのはなぜだろうか。

第二節 文学作品の中の『関帝靈籤』

（付）明清小説の中の『関帝靈籤』一覧表

『関帝靈籤』の流行ぶりは、当時の小説に多様に利用されていることから窺い知ることが出来る。

① 明清・冒襄（一六一一～一六九三）『影梅庵憶語』

「董小宛の思い出」

私は元旦に、その年のことを関聖帝君のおみくじで占うのが習わしだった。崇禎十五年（一五四二）には、功名心が強くて、お祈りをしてくじを抽いたら、「憶」の字で始まり、「その女とかんざし分け合つて（憶昔蘭房分半釵）、今ではばったり便りも絶えた。永久の愛とは愚かな願い、破綻は誰もが知っていたのに」（第七三籤）とあつたような気がする。そのときには意味がよく分からなかったが、試験に合格するというものでもないようだった。

董小宛と合ひ、四月末に金山で別れるときに、彼女は精進料理を食べ、虎嘯の関帝廟で、私に身を任せたい祈つて抽き当てたのがこの籤だった。その秋秦淮に寄つたとき、話題になり、願いが叶えられないのではないかと心配していた。私はそれを聞いて、元旦の籤と一致していたのが不思議だった。

そのとき同席していた友人が、「お二人のために、西華門でお

② 『二刻拍案驚奇』の中の関帝靈籤

みくじを抽いてやつたよ」と言つて、出したのもこれだった。彼女はいいよと恐がり、私がこの籤の「解釈」を見て憂慮していると、不安そうな顔をしたが、でも願望は叶えられた。だが「かんざしを分ける」とか「永久の愛を望んでも」とかは、みな夫婦の間柄の言葉で、結局それが叶えられないことだったのが、今あきらかになった。ああ、私に残された人生は、追憶の日々となった。おみくじの「憶」の字は、かくも靈驗あらたかである。

『三國志演義』『西遊記』『水滸伝』などの長編小説と並んで、『三言二拍』という短編小説集が明末に刊行された。これは五種類の短編小説集からなる名作ぞろいで、日本でも江戸時代に歓迎された。そのうちの『二拍』とは『初刻拍案驚奇』と『二刻拍案驚奇』の略称で、明末の凌濛初（一五八〇～一六四四）の作。その『二刻拍案驚奇』巻十五「韓副大臣の側室が正室に直され、顧芳が属官から主事に昇進したこと」（韓侍郎婢作夫人、顧提控掾居郎署）に、『関帝靈籤』が物語展開の要所に利用されている。

【物語要旨】

明の弘治年間（一四八八～一五〇五）のこと。太倉州（今の江蘇省太倉県）の郊外で餅屋を営む江溶は、冤罪で捕らえられたが、ひいきの客で、州の役所の胥吏をしていた顧芳の尽力で、無罪釈放となった。江溶はその恩義に報いようとして、娘の愛娘を顧芳の側室にと送り届けたが、顧芳は指一本触れることなく、送り返した。その後、江溶は暮らしに困つて、愛娘を徽州の大

商人の側室に売った。

一方、顧芳は胥吏の任期が満ちて上京し、韓副大臣の元で臨時の仕事をしていたときに、韓副大臣の夫人となった愛娘に再会した。愛娘が顧芳から受けた恩義を伝えると、副大臣は顧芳の徳行に感動して、天子に奏上したところ、顧芳は礼部（文部省）の儀礼担当主事として、正式の役職を与えられた。

これより先のこと、商人は愛娘を側室に迎えたが、愛娘に近づこうとするたびに、激しい頭痛に襲われて、肌を合わせることも出来なかった。商人はかねて信奉していた『関帝靈籤』を抽いて、愛娘とは結ばれる縁がないことを悟り、愛娘を義理の娘として遇することに改めた。その後、愛娘は韓副大臣の側室に迎えられることになったが、間もなく、副大臣の正室が病死し、愛娘が正室に取り立てられることとなった。顧芳と再会したのは、そのころのことである。

【次の引用は、その物語展開の中で、『関帝靈籤』が関連する場面の訳文である。】

さてその日になり、徽州商人が愛娘を側室に迎えた。徽州の人々には新婚夫婦をからかう習慣があり、親戚・知人・友人がそのことを聞きつけて、酒樽をもってお祝いに訪れた。お祝いとはいうものの、半分はからかうのが目的で、新郎に飲ませてつぶすのが楽しみだった。その夜商人は泥酔して、初夜の営みもどこへやら、新婦の脇で翌朝まで眠りこけてしまったところ、夢の中で金色のよろいを着た神様が現れて、鎚で頭を殴り、蹴飛ばして起こし、

「この方は、高官の奥方になられるお人で、凡俗の者の連れ合いではない。軽々しいことをしてはならぬ。わしの

言うことを聞かぬと、罰が当たるぞ」

商人が驚いて目を覚ますと、ひどく頭が痛み、やつとのことで起きあがった。不思議な夢だと思いながら不安になり、いつも関羽のおみくじを厚く信仰していたので、顔を洗うと携帯用の小物箱から銭を十枚取り出して、虚空に向かってお祈りをし、この女との縁を占った。出たのは第十五籤だった。

両家は格が釣り合うも、縁がなければ無理するな。春風吹くころいい知らせ、楽を奏でて結ばれる。

この意味をいろいろ考えて、「縁がなければ」とか、「春風吹くころ」「楽を奏でて」とかとあるのを見ると、目先のものは止めて、時期を待てという意味だろうか。心の中いよいよ分からなくなり、再度占うと第七十三籤だった。

その昔女とかんざし分け合って、今ではばったり音信絶えた。

永久の愛とは愚かな願い、破綻は誰もが知っていたのに。

この籤を得て、結局は叶えられない縁だと悟った。夢の中で、「高官の奥方になられるお人」と言われたのは、別の人に嫁ぐという意味ではないだろうか、またお祈りをして占うと、第七十七籤だった。

物にはすべて主がある、一粒一本勝手に取るな。

天から生まれた英雄も、なす事はみな規則に従え。

商人はこれを見ると、おみくじの意味はこれではつきりした。きつと別の相手がいるに違いない。これで決心がついた、と心の中でつぶやいた。

とはいっても、昼間女の美しさを見ると、気持ち揺らぐのだったが、そのたびに頭が痛くなった。夜になって女のベッド

に近づく、ぼーとなり、頭痛がひどくて堪えられないほどだった。どうもおかしい。夢のお告げは確からしい。占いの文句もはつきりしているし、もしあの女を汚したら神様のおとがめがあるに違いないと、邪念を捨てて、義理の娘として嫁がせてやったら、後で富貴になるかもしれない、と考えるのだった。

③ 明清小説の中の『関帝靈籤』一覧表

おみくじは人間の運命を予告するから、人間の運命を描くことを任務とする小説には、好んで用いられた。明清の小説や詩歌には多くの例を指摘することが出来る。小説の場合について指摘すると次のとおりである。

◆ 文言小説（筆記・随筆）の中の『関帝靈籤』一覧表

〔書名巻数の後のアラビア数字は、『関帝靈籤』の番号〕

- A 明・陸粲（二四九四～一五五一）『庚巳編』巻七 63, 36, 1, 23, 73
- B 明・葉紹袁（一五八九～一六四八）『午夢堂集』付録一「葉天夢自選年譜」 71, 87
- C 明清・冒襄（一六一一～一六九三）『影梅庵憶語』 73
- D 清・王士禎（一六四三～一七一）『池北偶談』「自選年譜」 13, 25
- E 清・袁枚（一七一六～一七九七）『子不語』巻十五 3, 巻二十一 20, 巻二十一（『隨園詩話』巻七） 47
- F 清・紀昀（一七二四～一八〇五）『閱微草堂筆記』巻六灤陽消夏録（六） 87, 巻十二槐西雜誌（二） 71
- ◆ 白話（口語）小説の中の『関帝靈籤』
- 〔書名巻数の後のアラビア数字は、『関帝靈籤』の番号〕

- A 明・馮夢龍『醒世恒言』巻七「錢秀才錯占鳳凰儔」 73
- B 明・凌濛初『二刻拍案驚奇』巻十五「韓侍郎婢作夫人、顧提控掾居郎署」 15, 73, 27
- C 明・長安道人國清『警世陰陽夢』「陽夢」巻七 72, 37, 27「陰夢」巻九 76
- D 明・古吳金木散人『鼓掌絕塵』第八回 22
- E 明・西湖漁隱主人（崇禎）（序）『歡喜冤家』第五回 71, 15, 74, 43 第統第十一回 63
- F 明・穆氏『関帝歷代顯聖誌伝』巻二「燕南丹救賈一鶚父母」 63 巻三「沮張相奸謀高閣老」 67 巻四「西昌告郭中丞平播」 40
- G 清・西周生『醒世姻緣伝』第五十二回 72
- H 清・天花才子（康熙）『快心編』第三集第八回 7, 71
- I 清・烟水散人（清初）『合浦珠』第十三回 68, 74
- J 清・樵雲山人（順治～康熙）『飛花艷想』第六回・十一回 97 前半二句と71後半二句
- K 清・杜綱（一七四〇？～一八〇〇？）『娛目醒心編』巻一第三回「利在南行」
- L 清・樂鈞（一七六六？）『耳食録』一「方比部」 46
- M 清・張培仁『妙香室叢話』「査翁暴富」 68
- N 清・無名氏『善惡図全伝』第十四回 1
- O 清・無名氏『関聖帝君靈籤占驗輯略』（『関帝文献匯編』第九冊所収）（多数）

第三節 靈籤のいろいろ

中国における靈籤の歴史は古く、現存するものとしては、宋代ま

で遡ることが出来る。明の中頃、一五世紀中頃に刊行された『正統道藏』には、七種類の靈籤が収められていて、多様な形式の靈籤を見ることが出来る。

① 現存する最古の靈籤

宋・嘉定年間（一二〇八～一二三四）刊『天竺靈籤』

（鄭振鐸編『中国古代版画叢刊』第一冊所収）

② 『道藏』所収の靈籤

◆『正統道藏』（一四四六年刊）正一部所収の靈籤

『四聖新君靈籤』『玄真靈応宝籤』『大好生九天衛房聖母元君靈応宝籤』『洪恩靈濟眞君靈籤』『靈濟眞君注生堂靈籤』『扶天広聖如意靈籤』『護国嘉濟江東王靈籤』

◆『万曆統道藏』（一六〇七年刊）

『洪恩靈濟眞君靈籤』『靈濟眞君注生堂靈籤』『玄天上帝百字聖号（玄帝感応靈籤）』

重複が二種（斜体字箇所）あるので、合計八種。宋・明末の成立。（酒井忠夫「中国の籤と葉籤」（酒井・今井・吉本『中国の靈籤・葉籤集成』へ風響社）所収の解説に指摘がある。）

③ 明清小説の中の靈籤（『関帝靈籤』を除く）

表記法：靈籤名、籤番号、第一句、収載小説名、収載箇所（―印は該当項目が欠けている意）

観音靈籤、第18籤、「天生与汝有姻縁」、『醒世恒言』、卷三十九
 観音靈籤、第59籤、「去住心無定」、『警世選言』、卷二
 観音靈籤、第33籤、「枯木再逢春」、『警世選言』、卷二

観音大士靈籤、第16籤、「銀塘昨夜双鴛穩」、『驚人奇案』、第六起
 諸葛武侯廟中の祈籤、―、「逢崖切莫宿」、『輪廻醒世』、卷九
 諸葛武侯廟中の祈籤、―、「逢崖切莫宿」、『龍図公案』、卷四
 諸葛武侯廟中の祈籤、―、「逢崖切莫宿」、『百家公案』、卷二第八回
 諸葛武侯廟中の祈籤、―、「逢崖切莫宿」、『海剛峯先生居官公案伝』、卷二

青城山の老君廟の靈籤、第32籤、「百道清泉入大江」、『醒世恒言』、卷二十六

毘盧觀の土地神の靈籤、第18籤、―、「石点頭」、卷九

東街靈祭廟籤、「星辰多不順」、『百家公案』、卷七第六十二回

④ 酒井・今井・吉本編『中国の靈籤・葉籤集成』付載「靈籤・葉籤一覧表」

現存する中国の靈籤と葉籤二一五種について、籤詩の第一句、靈籤名、本数、流布地域、寺院等所蔵者、収録書に関する情報の一覧表である。この中でとくに同一靈籤の数が多いいのは、『関帝靈籤』『観音靈籤』『聖母靈籤』『観音聖母靈籤』で、『関帝靈籤』の人気の高さが知られる。

第四節 『関帝靈籤』のテキスト

現在比較的容易に見られる『関帝靈籤』のテキストは下記の通りである。テキストによつて、文字に相違は見られるが、基本的には同内容である。

表記方法：靈籤名、籤詩数、籤詩第一句、所在（収載書・書肆・所蔵機関）

第Ⅰ類 江東王靈籤系^(二)

- ①『護国嘉済江東王靈籤』、100、「巍巍獨歩向雲間」、「正統道蔵」第54冊正一部
- ②『関帝靈籤』、100、「巍巍獨歩向雲間」、「関帝文献匯編」第七冊「関帝全書」卷35
- ③『関帝靈籤』、100、「巍巍獨歩向雲間」、「関帝文献匯編」第九冊
- ④『関帝靈籤』、100、「巍巍獨歩向雲間」、「蔵外道書」第四冊「関帝明聖經全集」（宏大善書局石印）
- ⑤『関帝帝君城隍爺公正百首籤解』、100、「巍巍獨歩向雲間」、台湾竹林書局
- ⑥『関帝帝君万応靈籤』、100、「巍巍獨歩向雲間」、道光六年馬氏尚勤堂重刊龍雲齋蔵板、東京大学東洋文化研究所蔵
- ⑦『新鐫関帝帝君靈千金譜』、100、「巍巍獨歩向雲間」、光緒十五年永興退士序刊、東京大学東洋文化研究所蔵
- ⑧『関帝靈籤』、100、「巍巍獨歩向雲間」、享保十（一七二五）年書林天王寺屋市郎兵衛刊和刻本、京都大学図書館蔵
- 第Ⅱ類 非江東王靈籤系^(三)
- ⑨『武帝靈籤』、105、「撃壤高歌作息時」、道光六年馬氏尚勤堂重刊龍雲齋蔵板、東京大学東洋文化研究所蔵。武帝とは武安王のことで、関羽は宋の徽宗の大観二（一一〇八）年に武安王に加封された。
- ⑩『聖籤』、101、「撃壤高歌作息時」、「関帝文献匯編」第一冊「関帝帝君聖蹟図誌全集」卷三収。（酒井 等編『中国の靈籤・葉籤集成』付録に転載。）
- ⑪『夢授籤』、101、「撃壤高歌作息時」、「関帝文献匯編」第七冊「関帝全書」卷三十四収。⑧と同内容だが第102籤から第105籤までの四

籤を欠く。

付

- ⑫『限籤卦籤』、64、「亘古生成第一忠」、（所在は⑥『関帝帝君万応靈籤』冒頭）

第五節 なぜ『関帝靈籤』が流行したのか

『関帝靈籤』流行の理由として、『三国志演義』の流行が深く関わっていたことはいうまでもなかるうが、同時に次の情況にも目を向ける必要があるであろう。

① 関羽は宋・清期に朝廷から尊崇され、孔子の“孔夫子”と並んで“関夫子”と呼ばれたただけでなく、〴〵侯・〴〵王・〴〵帝の位まで贈られた。民間でも関羽神として、道教の廟だけでなく、仏寺でも祭られ、人気拔群の神となった。

宋・大観二年（一一〇八）武安王

明・万歴年間（一五七三～一六一五）三界伏魔大帝

清・乾隆三十二年（一七六七）忠義神武靈佑関聖大帝（『関帝全書』卷1封爵考）

② 関帝は靈籤だけでなく、扶乩^{ふけい}という降霊現象に属する占い（日本でも、かつて“こつくりさん”という類似的の占いがあった）にも登場して人気があった。

〔清・袁枚（一七一一～一七九七）『子不語』卷二「関神断獄」

（関羽神のお裁き）〕

灤陽（今の江蘇省灤陽市）の馬豊が、科擧の受験勉強をしていたころ、町の西にある村の李家で家庭教師をしていた。その隣に住む王は凶暴な人で、いつも妻をむち打っていた。妻が空腹に耐えられな

くなり、李家の鶏を盗んで食べたことがあった。李家が気付いて王に告げると、酒が入っていた王はひどく腹を立て、刀を手にして妻を連れてやって来て、問い詰めて殺そうとした。妻は恐れて、鶏は馬豊が盗んだのだと偽った。馬豊は言い争ったが、決着がつけられなかった。村の関帝廟へ行つて、杯投で占つて決めよう。陰の卦が出たら女が盗んだことにし、陽の卦が出たら男が盗んだことにしよう」と提案した。話がまとまり、杯投を三回投げて占ったところ、三回ともみな陽が出た。王は刀を捨てて妻を放して帰ったが、馬豊は鶏泥棒の汚名を着せられて、村人の信用を失い、数年間は家庭教師の口が得られなくなった。

後日のこと、村で扶乩が行われ、占い師が壇に上り、「我は関羽神である」と人々に告げると、居合わせた馬豊が数年前のことを思い出して、関羽神はでたらめだ、靈驗がないと激しく罵った。すると砂盤（砂を敷いた皿状の器）に、

「馬豊よ、そなたはやがて人民の上に立つ身であるのに、物事の緩急・軽重さえわきまえないのか。そなたが鶏泥棒と言われても、家庭教師の口を失うだけだが、王の妻が鶏泥棒と言われたら、即座に斬り殺されるところであったのだぞ。だから我はでたらめものの不名誉をこうむつても、あの女の命を救つたのだ。天の神は、我が政治認識を高く評価されて、三階級特進の待遇をしてくださった。それでもまだ我を恨むのか」と文字が現れた。

それを見て馬豊は納得した。

③『関帝靈籤』の善書との結合

宋以降、とくに明清時代には、善書という勸善懲惡の思想が流行した。これは儒教・仏教・道教を内包したもので、三教思想とも呼

ばれ、知識人を含む広範な階層の人々に広く浸透した。『関帝靈籤』には、『太上感應篇』や『関聖帝君覺世真經』（覺世真經）など、善書の代表的な書の教えが深く取り入れていた。

【第29籤】「先祖が長く徳を積み、その幸せが今にも及ぶ。今後も修行を続けたら、天の報いがあるだろう。」

【第59籤】「家が衰え孤独に苦しみ、お祈りしても靈驗がない。先祖に陰徳あつたので、養子のおかげで家続く。」

『太上感應篇』(「上述のごとき諸々の罪を犯してはならぬ。')かくのごとき罪は、司命神がその軽重に随つて、その人の寿命を縮め、寿命が尽きれば死ぬ。死後にまだ罪が残っていれば、災いが子孫に及ぶ。」

『陰陽文』「早い応報は自分に来る。遅い応報は子孫に来る。」

『覺世真經』「早い応報はその身に来る。遅い応報は子孫に来る。」

【第67籤】「心の動きはすぐ神が知る、迷いを我（神）に問うな。父母に孝行兄弟仲よくしたら、きつと家庭に福が来る。」

【第100籤】「我はもと雷雨を司る神仙で、人の吉凶禍福は先に知る。至誠で祈れば靈驗がある。この籤抽いたら万事に吉。」

『太上感應篇』「善い心を起こすと、まだ善いことをしないうちに、すぐに善神が付き従う。悪い心を起こすと、まだ悪いことをしないうちに、すぐに悪神が付き従う。」

『覺世真經』「あらゆる善事は、心を込めて実行せよ。人の目に付かなくても、神にはすぐに聞こえる。『人の善惡は』神はすべて監察し、少しも見落とすことがない。」

【第76籤】「刑書には罪条三千文字八千あるが、全部いちいち説明できぬ。善でも悪でも身から出るもの、禍福の本はみなここにある。」

『太上感應篇』「人の禍福にはこれといった定めはなく、その人が自分で招き寄せるものだ。」

『覺世真經』「善と悪との行いにより、禍福がそこから両途に分かれる。」

④ 善書の流行ぶり―社会風俗として―

〔李家瑞『北平風俗類徵』下冊「祠祀及禁忌」〕

前門の関帝廟では、毎月一日と十五日には善書を多く配布している。（道光都門紀略注）

毎月一日と十五日には、各地の廟で多く善書を頒布しているが、前門の関帝廟では特に多い。（同治都門紀略注）

「都門の善書頒布雜詠」…散財して祈願し神仙を感動させるというが、なぜ紙をばらまいて勧善するのか。病気の友人身内の世話をしないで、銭金ばらまき印刷屋をもうけさせるのか。

⑤ 善書の流行ぶり―民間私塾の教育内容として―

〔明清・李漁（二六一―一六八〇）の小説『連城壁』第九回〕揚州で雜貨店を営む呂春陽の家の住み込み教師は、毎月一日と十五日に、授業に先立ち『太上感應篇』を生徒の呂哉生に全編朗読させた、とある。

〔清・余蓮村『得一録』巻十「義字章程」塾中条例〕私塾の小学生用教科書（七種）…『三字経』『感應篇』『陰騭文』『覺世経』『文昌孝経』『朱柏廬家訓』『弟子規』

第六節 『関帝靈籤』の世界

① 『関帝靈籤』の体裁

『関帝靈籤』は、基本的には一番から百番までの番号を記された

百本の竹製の籤と、別に用意された説明用の札ないし冊子から成る。札の場合は一枚に一番分の説明に成っており、冊子の場合は百番分全部収められている。第四節の『関帝靈籤』のテキストがそれである。これがあれば、家庭でも抽くことが出来る。百本の籤を用意しなくても、コイン十枚用意して、籤番号を決める簡単なやり方もある。『関帝靈籤』のテキストには、それが記されている場合が多い。その各籤の説明内容は、第一籤の場合についていうと、次の十一項目からなる。

- ① 第一籤 ② 甲甲 ③ 大吉 ④ 籤詩の題名 ⑤ 籤詩 ⑥ 聖意 ⑦ 東坡解 ⑧ 碧仙註 ⑨ 解曰 ⑩ 釈義 ⑪ 占驗

籤詩はこれのおみくじの本文に当たるもので、七言絶句一首。聖意から釈義までは補足説明、占驗はこれのおみくじの靈驗譚（ごりやく話）である。聖意の内容は、「病氣の見通しは」とか「縁談はどうなるか」とかの尋ねごとへの回答で、これを見れば『関帝靈籤』の内容容―世界が知られるというものである。

② 『関帝靈籤』（全100籤）の「聖意」中の事項とその数

事項							内容							籤数							
1	訟	訴訟	2	病	病気の予測・治療	3	婚	結婚	4	行人	旅行者の安否・帰宅予想	5	功名(含名利)	科擧・仕進・事業	6	財	財産	7	孕	出産の安否・胎児の性別	27
																					52
																					76
																					81
																					81
																					91
																					97

③ 『関帝靈籤』の世界（半角数字は『関帝靈籤』の籤番号）

『関帝靈籤』の内容は、ごくおおざっぱに言うと、

(一) 善書の教えに従って、修養積徳に努力するよう説くもの

(二) 対人関係・人間理解を重視するよう説くもの

a 商人の苦勞（旅行の危険、商売の厳しさ）と留守家族（とくに妻）のさびしさに焦点を合わせるもの

b 「貴人」との出会いとその支援に、こだわるもの

c 交友関係を重視するもの

(三) 時世・機運・因縁を重視するもの

(四) 訴訟の忌避を強調するもの

(五) 農村暮らしを重視するもの

46 55 66 68

第七節 『関帝靈籤』の今日的な意義

上記のような内容の『関帝靈籤』が、今日の我々にどのような意義を持ちうるのか。時代背景が違ってから、そのまま今日の社会に当てはめるのは無理であるが、しかし今なお、我々の心に通じるものもまた少なくない。

① 第86籤—顧客の立場に立って、薄利多売に努力せよ

同じ品でも沢山売れば、薄利多売で利益が増える。

客の心をわが身にもてば、やがて今よりずっと良くなる。

〔聖意〕 財と禄は富む。訴訟は理が得られる。結婚はまとまる。

病氣は次第に止む。旅人の帰りは未詳。人を害するな、人即我だ。

〔東坡解〕 共同経営して、みな家もちたい。人に対して、自慢をするな。自然に神の加護があり、福と禄とが恵まれる。その上仲間を世話してやれば、神のご加護が更にある。

〔碧仙註〕 交易で公平なれば安泰で、人を自分と差別をするな。損人利己はしてならぬ、分を守って穏やかに。

*この項の訳には自信がない。

〔解曰〕 趣旨…何事も緩やかに進め、迅速を求めるな、良心に背く。商人の場合なら、売り時でも、客にも配慮し、双方に公平になるようにしてやれば、商売がよくなる。自分の利益だけ追求すると、必ず客を損ない、神の加護が得られなくなる。

② 第14籤—人の心を見抜け
佳人と出会ってすぐ気に入って、その後間もなくもめごと起きる。

人の心は変わるもの、経験積んで苦労知れ。

〔聖意〕 始め容易で、あとが困難。名と利ともに失う。病氣は不安。訴訟は反復する。懷妊は女子。旅人は返らず。もめ事が多い。

〔東坡解〕 円満解決望んでも、逆に生じる食い違い。人の多くが冷淡で、頼りにすることかなわない。ひたすら自分で反省し、だまされることないように。よく気を付けて、警戒心と深慮もて。

〔碧仙註〕 悲喜がこもごも入り交じり、虚妄ばかりで実がない。

人の心はころころ変わる、自分を頼るのが良策。

〔解目〕

この籤は、喜びの後に心配が起きるから、不注意な行動はするなどのお告げ。たいてい親しくなったり疎くなったり、心が合ったり離れたり、危険な目に遭っても、成功しないことがある。戦々恐々として、恐れ慎めば、後悔するようなことに遭わないですむ。

〔釈義〕

佳人とは美女のことで、いつもの従業員と異なっていて、急に好きになり、すぐにうち解けるが、やがてもめ事が起き、愛情が覆る。人情の冷暖は、こんなのが多くて、珍しいことではない。他人を軽く信用し、そのつど馬鹿にされて、やっと気付くことがあるのをわきまよ。遠くに出かけ、多く危険を経てこそ、人生の多難が理解できる。慎重に用心して、悔いを残さぬようにせよ。

〔小川補足〕 ”社長は美人の従業員に気を付けなさい。”

③ 第6籤―取引上の接待は投資効果を見極めて行え

派手な接待不必要、心の通わぬ遠い仲。

信用できない人物に、大きな期待をするなかれ。

〔聖意〕

名声は得られない。財産は散逸する。病気は治りにくい。難産に備えよ。婚姻はまとまらない。訴訟は決着せず。旅人は遅い。嘆いてもむだ。

〔東坡解〕

どんなに心を労しても、事態は悪化するばかり。計画進まず、疑惑と不信がつるだけ。心通わず、仲良くできぬ。ひたすら自分の、信念貫け。

〔碧仙註〕

互いに疑惑を抱いたら、一緒にいても心通わぬ。今からきつぱり、別れなさい。

〔解目〕

この籤は、君子を装いながら実際は小人に過ぎないものがあるから、そんな面従腹背のやからには気を付けよ、というお告げである。こんな人物についていると、もてあそばれるだけである。以前親密でも、途中で変わってしまつて、信用できなくなつたら、綺麗さっぱり絶交して、後悔せぬようにせよ。万事に迷いを払いのければ吉である。

おわりに

おみくじの説明書は最後まで読め―上述のように、説明書の中には解説・注釈が含まれていて、籤詩の受止め方や対処の仕方が示唆されている。「上上」だの「下下」だのだけで決めつけるな。「上上」でも傲慢になるな、「下下」でも絶望するなという。『漢帝靈籤』では、『易経』の循環思想によつて、「否極まつて泰来たる（困難が極まれば、やがて安泰になる）」という。次の第20籤もそれだ。花は風雨に耐えて咲き、人は苦勞で磨かれる。「下下」だからと読まないで捨てたら、救われるものも救われない。

【第20籤 乙癸 下下】

心を語る友もない、難所*の君に教えよう。

大勢すでに過ぎ去つて、功名・富貴もはやない。

*「難所」は、原文では「十八灘」に作り、江西省を流れる贛江にある十八箇所の浅瀬で、舟航の危険箇所として有名。

〔聖意〕 訴訟は凶、中止せばよし。名も利も軽い。病気は医師を選べ。旅人はまだ遠方。結婚には迷う。何事も、時の流れのままに。

〔東坡解〕 決断できぬ時には、ゆっくり考えよ。成り行き吉でも、

神仏頼れ。一步退き反省すれば、心配ごとがなくて済む。

そのうえ福德積んだなら、行くべき道が開かれる。

〔碧仙註〕 小舟で難所に出会ったら、転覆せぬよう防ぎなさい。

しつかり舵を取ったなら、凶事があっても安全だ。

〔解曰〕

この籤は、心の友がなく、孤立無援で、危険が待ち受けている状況を述べたもの。この指示を得たら、早く予防せよ。だが大勢すでに過ぎ去って挽回できないのだから、人の世の定めなき無常を達観するだけでなく、利欲と功名の束縛を断ち切り、恋々としてトラブルを起こすことのないように。この籤が出たら、苦勞が汝を磨き上げることゝをわきまえよ。困難の中から道が開ける日もあろうぞ。

《注》

(一)『江東王靈籤』（江東籤）と『関帝靈籤』とは同内容。もともと『江東王靈籤』と称されていたものが、明代のある時期から、もっぱら『関帝靈籤』の名で行われるようになったもの。おみくじ本の表紙を取り替えたただけものである。そのいきさつは、清の康熙（一六六二―一七二二）の楮人獲『堅瓠六集』巻四「江東籤」や翟灝（たかくし）（一七三六―一七八八）『通俗編』卷十九「抽籤」に言及はあるが、詳しいことはわからない。

(二)この系統のテキストは、⑩『聖籤』の末尾に付された盧湛の説明によると、順治八年（一六五一）に関帝が浙江寧波府の延慶寺の僧に授けたものであるという。そのときに、関帝が「これは『江東籤』よりも靈驗があるぞ」と言ったと記されるところなどからすると、表紙だけ取り替えて『関帝靈籤』と称するおみくじ本を使用すること、抵抗感をもった人がいて、自前の純正品を求めたらしいことが見て取れる。しかし、この試みは成功しなかった。

(三)このテキストは、⑥『関聖帝君万応靈籤』の冒頭に、関帝が明の張九法の夢に現れて、関帝の生平の忠義事実に基づき、六十四首の籤詩（これを卦籤という）と一〇五本の籤（これを限籤という）を作り、あまり字が読めないものにも、おみくじが抽けるようにしたものだという。まず限籤を抽き、「四十六許看第二句第一字」が出たら、次に卦籤を抽いて出た籤の第二句の第一字だけ見ればよいというものらしい。だが、これで占いがうまくいったかは疑わしい。これもはやらなかった。